

救急室に搬送された脳卒中患者の画像検査開始時間の振り返り ～画像検査開始までの時間調査からみえたこと～

新子美紀 奥田朋子

大阪府済生会中津病院 看護部

抄録

脳卒中患者は治療開始までの時間が予後を左右する。脳梗塞患者の来院から動脈穿刺までの時間（DTP：door to puncture time）目標は60分以内とされており、当院もこの時間を目標としている。診断に重要なMRIは20～30分程の時間を要するため、来院から画像検査開始までの時間を30分未満で行う必要があるが、現在、当院では現状の把握ができていないため、画像検査までに要した時間を調査し、課題や対策を考えたことを報告する。

Key word：血栓回収療法 DTP（door to puncture time） 脳梗塞

背景

脳卒中患者は治療開始までの時間が予後を左右する。脳梗塞患者の来院から動脈穿刺までの時間（DTP：door to puncture time）目標は60分以内とされており、当院もこの時間を目標としている。診断に重要なMRIは20～30分程の時間を要するため、救急室看護師は来院から画像検査開始までの時間を30分未満で行う必要がある。しかし、現在、当院ではDTPの測定が行えておらず、脳卒中患者が救急搬送されて治療が行われるまでにどれくらいの時間を要しているのか、現状の把握ができていない状態であった。

そのような背景から、少しでも早く治療を開始できることを目的に、脳卒中を疑う患者の来院から画像検査までに要した時間を調査し、課題や対策を考えたことを報告する。

方法

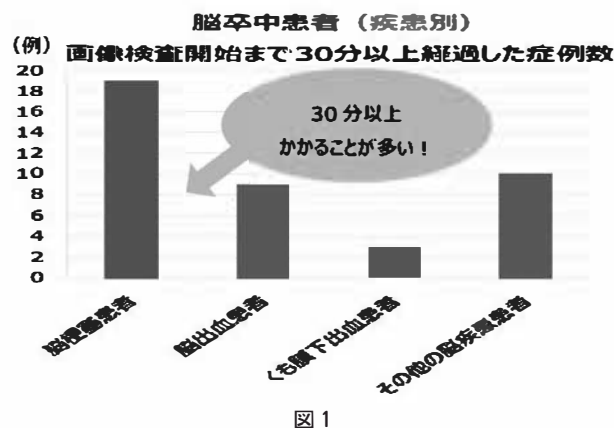
当院の2023年5月から2023年10月までの期間に救急搬送された、脳卒中を疑う患者数、疾患名、年齢、主訴、来院時間、画像検査（CT・MRI）開始までの時間、治療内容と処置内容、対応看護師数を診療録より後ろ向きに収集する。

結果

救急搬送された脳卒中を疑う患者は121例であり、疾患別では、脳梗塞43例、脳出血33例、くも膜下出血

11例、その他34例であった。その中で、来院から画像検査開始までに30分以上かかった脳梗塞患者は43例中、19例と、他の疾患に比べて約半数を占めていた（図1）。また、脳梗塞患者の主訴を分類し、来院から画像検査開始までの時間を調査したところ、麻痺・呂律困難を主訴とした脳梗塞患者は、1例を除き30分未満で画像検査が開始できていた。しかし、脱力・意識障害・目眩・ふらつき・しびれ等を主訴とした脳梗塞患者は、複数の処置や検査を行っており、画像検査開始までに30分以上の時間を要していた（図2）。

DTPの対象となる、血栓回収療法が適応となったのは5例であった。この5例においては、救急室到着時より、脳神経外科専門医が直ちに診察を行い、画像検査までの時間は全て30分未満で開始されていた。



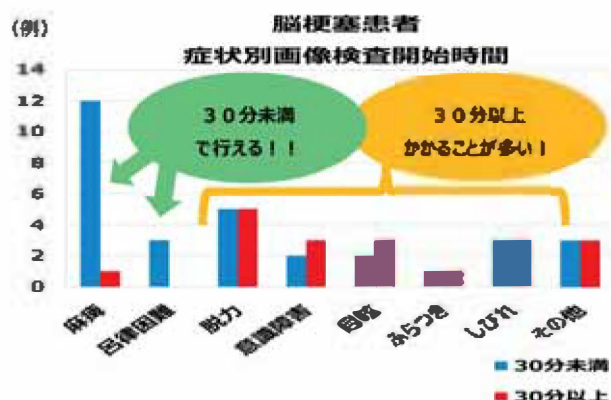


図 2

考 察

脱力・意識障害・目眩・ふらつき・しびれなどの主訴を認める場合は、脳梗塞以外の疾患も視野に入れ、複数の検査や処置を行っているため、画像検査開始までの時間が30分以上となる傾向があると考えられる。これに対して、麻痺や呂律困難を主訴とする場合は脳梗塞を強く疑い、搬送連絡と同時に脳梗塞患者の受け入れ態勢が整備できているため、目標時間内に画像検査を開始することが可能となっていることが考えられる。

結 論

当院の救急室に搬送された、脳梗塞患者のうち、麻痺や呂律困難以外の主訴を訴える患者は、画像検査開始までに30分以上の時間を要する。

課題・対策

今後は、麻痺や呂律困難以外を主訴とする患者においても、脳梗塞の可能性を念頭に入れ、画像検査の準備と、診療補助を同時進行で行い、画像検査開始まで30分以内を目指すことが課題である。また、他部署からのリリーフ応援で働く看護師や、脳卒中患者の対応に不慣れな救急室の看護師など、誰でも画像検査開始まで30分以内を目指し、DTP60分以内を目標とした時間管理と処置が行えるように、処置のフローチャートやチェックリストの作成(図3)や、画像検査を開始するまでの事前の準備物品をセット化(図4)し、医師や放射線技師等の、多職種のスタッフと連携を図り、脳卒中患者の社会復帰を目指していきたい。



図 3 : フローチャート (チェックリスト)



図 4 : 事前の準備物品セット